

世説新語の手法

榎 本 福 寿

(一)

歴史記述は虚飾を交えないことを原則とする。

孔子が「述而不_レ作」(論語・述而)と規定したその原則は、司馬遷の史記や班固の漢書などでも貫かれていて、これ以降、歴史書編述の規範としてながく受け継がれる。

ところが時代の下るに従い、その規範としての意味が薄れて、唐の太宗の時に編述された晋書は、かつて類をみない程の潤色が施されているといわれる。^②果してその潤色の実情はいかなるものであったのか。前稿^③では、世説新語(以下に世説と略称する)^④の所伝と、劉孝標が世説の注として諸書から拾い集めた世説の所伝に対するいわゆる異聞とを主に取りあげ、それらを晋書が編述においていかに利用していたのか、あるいはまた、晋書の潤色の度合ひいては編述そのものの実態を探ろうと試みたのであるが、その結論のあらましは、潤色の度合いは思いのほか低く、むしろ世説の所伝を始めとする先行資料をそうとう忠実に利用しているということであった。いわば伝記の豊かな肉付けをめざしてはいるものの、そこに潤色を施すその程度は、「述而不_レ作」の原則を逸脱するまでには至っ

ていないということであった。晋書の遍述においても、その史書という性格上、なお原則は等閑視されていない。以上が前稿で述べたことの概略である。小稿は、これを踏まえて、「述而不_レ作」の原則がともかくも貫かれてゐる晋書と、史書ならぬ、従つてそうした原則の規制をあまり受けていないと考えられる世説との記述上の相違は何か、あるいは一般的な言い方をすれば、原則の有無が記述にどのような違いをもたらしているのか、等の疑問をめぐつて世説に取り組む。

世説は史書ではない。隋書の経籍志で子部に分類され、「小説」（街説巷語之説也）と規定されている。これが以後引き継がれて、旧唐書経籍志また新唐書藝文志いずれにおいても「小説家」といった同じ扱いを受ける。

こうした世説の記述上の特徴はなにか、それは史書の記述と較べてどのような点が特異なのか、問題をこの点にしぼるが、先学によって史書のうちでも潤色の程度がはなはだしいとされる晋書や後漢書、あるいは三国志その他、また史書ではないが人物の伝記という相通う性格をもつ高僧伝など、史書ないしそれ相当の書から世説の所伝と内容上一致する所伝を拾い出し、双方の記述の比較を通して、とりわけ世説のその特徴を明らかにしたいというのが小稿の意図である。

ところで、世説の文体上の特徴を指摘した論考に吉川幸次郎氏の「世説新語の文章」がある。世説に特徴的な表現とその背景などに犀利な考察を加えておられるが、世説に対する基本的な把握は「魏晉南北朝の史家の文章には程度の差こそあれ、『世説』と同じような特色が認められるのであって、その特色を最も強く表わしているのが『世説』であるに過ぎぬ。」（『吉川幸次郎全集7』四五五頁）とあり、世説の特色を、最も強いと言われるにせ

よ、時代の一般的な傾向として捉えておられる。そこには、世説の独自性という観点が欠落しているように思われる。世説が時代の特色を最も強く表わしているとしても、否そうであればこそなおさら、「特色を最も強く表わす」は、やがて世説の個性の問題、いわばその独自の性格の如何というところに自らゆき当らざるを得ないのではないか。

結論を言えば、世説はあくまでも「小説」であって、この性格が文体と表裏あいまって世説を特徴づけているとみることが出来る。その特徴は、史書のものではあり得ない。以下に、まずは晋書との比較を通して世説の特徴を探ることにする。^⑥

(一)

○張憑學孝廉一出都、負其才氣、謂必參時彥。欲詣劉尹、鄉里及同學者共笑之。張遂詣劉。劉洗濯料事、處之下坐、唯通寒暑、神意不接。張欲自發、無端。頃之、長史諸賢來清言。客主有不通處。張乃遙於末坐判之。言約旨遠、足暢彼我之懷。一坐皆驚。眞長延之上坐、清言彌日、因留宿。至曉、張退、劉曰、卿且去、正當取卿共詣撫軍。張還船、同侶問何處宿。張笑而不答。須臾、眞長遣傳教覓張孝廉船。同侶惋愕。卽同載詣撫軍。至門、劉前進謂撫軍曰、下官今日爲公得一太常博士妙選。既前、撫軍與之話言、咨嗟稱善曰、張憑勃窣爲理窟。卽用爲太常博士。(世説・文学第四・53)

○張憑字長宗。(學孝廉、負其才、自謂必參時彥。初欲詣悵、鄉里及同學者共笑之。既至。悵處之下坐、神意不接。憑欲自發而無端。會王濛就悵清言。有所不通。憑於末坐判之。言旨深遠、足暢彼

我之懷。一坐皆驚。愜延^二之上坐^一、清言彌^レ日、留宿。至^レ旦、遣^レ之。憑既還^レ船、須臾、愜遣^レ傳教^レ覓^二張孝廉船^一。便召與同載、遂言^二之於簡文帝^一。帝召與語、歎曰、張憑勃窣爲^二理窟^一。官至^二史部郎、御史中丞^一。(晉書・列傳第四十五・張憑)

世説・晋書ともに張憑の出世譚を伝える。孝廉に挙げられた張憑が周囲の冷笑をしり目にもち前の才気で劉尹(劉惔)に取り入り、彼を驚嘆させたことによりやがて引き合わされた撫軍(簡文帝)まで感嘆させるといふ内容で、晋書が長文にわたって世説を利用した例である。全体の筋の展開ばかりでなく、表現の細部に至るまで忠実に引き写しているが、一方また、手を加えている箇所も少なくない。その主なものを抜き出すと、

(一)出^レ都。

(二)洗^二濯料事^一、^レ唯通^二寒暑^一。

(三)張退。劉曰、卿且去、正當^二取^レ卿共語^二撫軍^一。——遣^レ之。

(四)同侶問^二何處宿^一。張笑而不^レ答。

(五)同侶惋愕。

(六)至^レ門、劉前進謂^二撫軍^一曰、下官今日爲^レ公得^二一太常博士妙選^一。既前、——遂言^二之於簡文帝^一。

(七)咨嗟稱^レ善曰、——歎曰、

(一)(二)(四)は晋書に対応記述がなく、省略されたもの、一方(三)(六)(七)は晋書で大幅に縮約されているものである。これら省略ないし縮約された箇所は、基本的な話の筋の展開に与るその程度は低い。当然のことながら、ことに省略箇所には根幹となる事柄の記述は含まれていない。たとえば劉尹が氣負つてやってきた張憑に対してどのように応接

したのか、「洗_ニ濯料事_一」「唯通_ニ寒暑_一」(乙)を省いても、晋書に「處_ニ之下坐_一、神意不_レ接。」とある限りで、それはなほだ疎略なものであったことを窺わせるに足る。同様に、劉尹に認められ一日中語り合つてその晩泊つた後で船に帰つた張憑と同伴とのやりとり、すなわち「同伴問_ニ何處宿_一。張笑而不答_一」(四)も、またさらに、帰船後間もなく劉尹が使いを遣つて張憑をさがし求めさせたことに對する「同伴惋惜_一」(五)という記述も、いずれも省略によつて話の展開に支障をきたすものではない。

一方、縮約されている箇所は全体の構成にかかわるその度合が大きく、話の展開に欠かせない記述を含む。一日中語りあつた拳句そのまま泊らせたというところから、船に戻つたというところまで、この間を全て省くことは不自然さを逸れない。世説では、張憑が明けた帰るところで劉尹が撫軍の許に連れていつてやろうと約束するその言葉を含めた委細な記述(三)がその間に展開するが、晋書は、それを僅かに「至_レ且遣_レ之_一」と記すに過ぎない。またいよいよ撫軍の許に至るくだりから語り合うまで、この間の撫軍に張憑を推す劉尹の言葉を含め推薦する過程を委細に伝える世説の記述(六)を、晋書は「遂言_ニ之於簡文帝_一」の一句に、あるいは張憑と語り合つた撫軍が感嘆する記述では、世説の「咨嗟稱_レ善_一」(七)を「歎_一」の一語にと、それぞれ縮約が大幅に施されている。同じようにこれらも、話の基本的な構成を維持するためには不可欠な、とはいへ必要最小限の記述だったに違いない。

ところで、右のように世説の所伝を基にその一部を省略・縮約というように手を加えて成り立つ晋書の所伝は、内容の上で世説と大差ない。手を加えても、それが所伝の基幹部分ではなく、また世説所伝の基本に添う限り、内容上大差なくてむしろ当然なのであるが、張憑の伝記が晋書の記述で十分了解できるといふ点では、世説の記述はいかにもくどい。世説の特徴は、そうした記述のくどさ、よく言えば委細さに求められる。それが何にもとづくの

か、委細な記述をめざすその意図が改めて問われなければならない。

世説では冒頭に「學孝廉、出都」とあるが、晋書はその「出都」(一)を省く。九品官人法によれば、孝廉に挙げられた後に中央で試験を受けるのが魏晋以降の通制であったという(宮崎市定著『九品官人法の研究』六三頁)。

しかも張憑は「謂必參時彦」という志を抱いていたとあるのだから、「出都」と記述するまでもなく、以下の話の舞台が都であることは容易に了解できたはずである。それを、世説は敢えて表わす。そうした点にもそれと知られるであろうが、世説の記述は、所伝をその事跡(結果)を主にして描いたものではなく、そこに登場する人物の行為やその背景などを話の展開の中に刻明に写し出そうといった強い意欲をみせる。繰りかえし挙例すれば、

世説——即同載詣撫軍。至門、劉前進謂撫軍曰、下官今日爲公得太常博士妙選。既前、撫軍與之語言、晋書——便召與同載、遂言之於簡文帝。帝召與語、

事柄としては、晋書の記述にある通りの、共に簡文帝の許に行き話を交すというに過ぎないことでも、世説では、その事の次第を、かりに動詞だけを並べても「載・詣・至・進・謂・曰・前・語言」というように多用して描く。動詞の多用自体は行為を一つ一つ丁寧に追いなから描き出そうとしたその結果に外ならないが、それに象徴されているように、世説の記述上の特徴は、現実の事態が展開してゆくその一つ一つにそくして表わそうとしている点からまず挙げられる。^⑨

いわば展開する事態の細部に至るまで記述の中に取りこもうとするその手法は、事態それ自体ばかりでなく、事態間の相互の関係もまた明らかに示す。世説・晋書ともに劉尹に取りあつてもらえないでいたという張憑のいささか当惑ぎみな状態をほぼ同じく「欲自發無端」と記すが、それと、以下の事態との間を繋ぐ記述において、

世説——頃_レ之、長史諸賢來清言。

晉書——會、王濛就_レ惔清言。

「しばらくすると長史諸賢がやって来て清言した」という世説の記述は、それが晉書に「會」たまたまと表わされているような偶発の事態なのか、あるいは約束事なのか、また習慣なのかいづれとも不明という外ないが、ともかくも、前文から後文へと事態が展開するその前後の關係を現実の事態の展開にそくして明示したものであることは疑う余地がない。「會」では、そうした事態間の關係、すなわち前後の時間的な推移は迫りがたい。類例を挙げると、

世説 ↑ ↓ 晉書

共笑_レ之。張遜詣、↑↓共笑_レ之。既至、

客主有不_レ通處。張乃遙於_ニ末坐_ニ判_レ之。↑↓有所_レ不_レ通。憑於_ニ末坐_ニ判_レ之。

清言彌_レ日、因_レ留宿。↑↓清言彌_レ日、留宿。

右の傍線を付した語はいずれもそれであって、關係明示は世説の記述の特徴的な手法といふべきであろう。

こうして晉書の記述と比較した場合に、世説は、現実に展開する事態にそくして委細に記述している点と、さらには事態相互の關係についても明示的に記述している点と、この二点が記述上の特徴となる。特徴があらわな例は枚挙にいとまない。

○郗司空在_ニ北府_ニ、桓宣武惡_ニ其居_ニ兵權_ニ。郗於_ニ事機_ニ素暗、遣_レ賤詣_レ桓、方欲_ニ共獎_ニ王室_ニ脩_ニ復園陵_ニ。世子嘉賓出行、於_ニ道上_ニ聞_ニ信至_ニ、急取_レ賤、視竟、寸寸毀裂。便廻還更作_レ賤、自陳、老病不堪_ニ人聞_ニ、欲_ニ乞_ニ閑地_ニ自養_ニ。宣武得_レ賤大喜、即詔轉_ニ公督五郡會稽太守_ニ。（世説・捷悟第十一・6）

○時愔在北府、愔（桓溫）深不_レ欲_二愔居_一之。而愔暗_二於事機_一、遣_レ愔詣_二溫_一、欲_二共盤_三王室_一、修_二復園陵_一。超取_レ視、寸寸毀裂。乃更作_レ牋、自陳、老病甚不_レ堪_二人間_一、乞_二閑地_一自養。溫得_レ牋大喜、即轉_レ愔爲_二會稽太守_一。（晉書・列伝第三十七・郗超）

郗司空（郗愔）が北府（軍府）にあつて兵權を握つてゐることを快く思わない桓宣武（桓溫）に対して、事機にうとい郗は、共に帝室の失地回復を図ろうと認めた書簡を送る。これ以下の、長子郗嘉賓（郗超）が氣転を利かせてその書簡を途中で破り捨て、老を理由に閑職を乞うという全く別の内容のものに作りかえてしまうという一節において、世説の記述は、

世子嘉賓出行、於道上聞_二信至_一、急取_レ牋、視竟、寸寸毀裂、便廻還更作_レ牋、

郗嘉賓の行動を委細に追う。その全体は、晉書で「超取視、寸寸毀裂、乃更作_レ牋」というだけの頗る簡略化された記述にかえられる。記述を事柄の基本的な筋だけを伝えることに限定すれば、晉書がそれを削つてゐるように、傍線を付した記述は不要という外ない。

そうした点からも、世説の記述が現実の事態の展開にそくして、そこに繼起的に生起する行為やその背景を刻明に描き出そうとしていることは疑いない。一方また關係記述でも、晉書の「超取視、寸寸毀裂」に引きくらべるまでもなく、世説がその明示に意を用いていたことは、たとえば「急取_レ牋、視竟、寸寸毀裂」に徴して明らかである。

記述上のそうした特徴は、次の例においても同様に窺うことができる。

○王平子出爲_二荊州_一。王太尉及時賢送者傾_レ路。時庭中有_二大樹_一、上有_二鵲巢_一。平子脫_二衣巾_一、徑上_レ樹取_二鵲子_一。涼衣

拘^レ蘭樹枝^一、便復脫去。得^レ鵲子^一還下弄、神色自若、傍若無^レ人。（世説・簡傲第二十四・6）

○澄將^二之^一鎮^二、送者傾^レ朝。澄見^二樹上鵲巢^一、便脫^レ衣上^レ樹、探^レ鷺而弄、神氣蕭然、傍若無^レ人。（晉書・列伝第十三・王澄）

王平子（王澄）が荊州の刺史となつて赴任するにあたり、当代の名士たちが大勢見送るさなかになされた彼の奔放なふるまいを伝えるくだりであるが、晋書の記述が「樹上鵲巢」と単なる語法的結合として表わすところを、たとえばそのように現象上は一つの事物として捉えられるものであるにせよ、世説では、庭に樹があつてその上に鵲巢がある「庭中有^二大樹^一、上有^二鵲巢^一」というように、樹や鵲巢が現実^ニに在るそのそれぞれの在り方にそくして記述している。あるいはまた、鵲のひなを得て弄ぶという一節にしても、晋書の「探^レ鷺^{ひな}而弄^レ之」に対して、世説の記述は、それが「得^二鵲子^一、還下弄」とあり、ひなを得て上^のった樹から還り下りて弄ぶというように、現実^ニに展開するその一つ一つの事態（行為）を記述に取りこむといった特徴をみせる。さらに事態間の関係記述でも、「平子脱^二衣巾^一、徑上^レ樹」とあるが、服や頭巾を脱ぐこと自体が樹のぼりのためであり、脱いですが（徑）のぼることは表わすまでもない。そうした自ら推測されて然るべきこと、つまりは現実^ニに事態二つが関連しながら展開するその関係を記述の上で明示しているのである。晋書は、それを「脱^レ衣上^レ樹」と記述するに過ぎない。これと同様の例に、世説の「（送者傾^レ路。時庭中有^二大樹^一。）（と対応する晋書の「送者傾^レ路。澄見^二樹上鵲巢^一。」とがあり、晋書の記述には、世説に特徴的な関係を明示する「時」がない。

○王藍田性急。嘗食^二雞子^一、以^レ筯刺^レ之、不^レ得。便大怒、舉以擲^レ地。雞子於^レ地圖轉未^レ止。仍下^レ地、以^二屐齒^一蹙^レ之、又不^レ得。瞋甚、復於^レ地取^二內口^一中、齧破即吐^レ之。（世説・忿狷第三十一・2）

○但性急爲果。嘗食_レ雞子_一、以_レ筋刺_レ之、不_レ得。便大怒、擲_レ地。雞子圓轉不_レ止。便下_レ牀、以_レ屐齒踏_レ之、又不_レ得。瞋甚、掇_レ内_ニ口中_一、齧破而吐_レ之。(晉書・列伝第四十五・王述)

右は、たいへんな癩癬もちだったという王藍田(王述)にまつわる笑話めいた一段で、彼が鶏卵を食べようとして箸で刺したがうまく刺せず、大いに腹をたてたところまでは、世説・晋書ともに記述の一致をみる。これ以降、世説の記述は特徴的である。まず腹をたてて卵をなげるくだりで、晋書が「便大怒、擲_レ地」と記述するその限りで十分了解可能であるはずのところを、世説では、なげる前にそれが自ら前提となる卵をとりあげる「便大怒、舉_レ以_レ擲_レ地」という行為を表わす。またなげた卵がころがって止まらないという一節においても、晋書の「雞子圓轉不_レ止。」に対して、「雞子於_レ地圓轉未_レ止。」というように、世説ではそれが起こる場所も明示する。この一文の直前に「擲_レ地」と記す以上、卵が地上をころがるのはいわずもがなのことであり、「於_レ地」は省き得ない語では勿論ない。同様に、ころがる卵を屐の齒で蹴_レもうとして失敗、激怒した後に続く世説の「復_レ於_レ地取_レ内_ニ口中_一、齧破、即吐_レ之。」という記述についても、晋書の「掇_レ内_ニ口中_一、齧破而吐_レ之」とだけ表わすその記述に、世説の「復_レ於_レ地取_レ」は前提となつてゐるはずであつて、それを省略しても、叙述の展開上なら支障はない。

とはいえ、省略すれば、それだけ、記述は具体的な描写から遠ざかる。いきおい文脈からの推測にゆだねられる程度は増すことになる。その逆、つまり繁をいとわず現実の事態の展開にそくしてできるだけ刻明に記述すること、これこそ世説が記述上めざしたことに外ならない。事態間の関係記述でも、

世説 ↑ 晋書

瞋甚、復_レ於_レ地取_レ内_ニ口中_一、↑瞋甚、掇_レ内_ニ口中_一、

齧破、卽吐之。↑↓齧破、而吐之。

履の齒で蹴もうとして「仍下地」という前の事態をふまえての「復於地」であり、一方、卵を口に入れてかみつぶし、それを即座にペッと吐き出したその関係を表わしたのが「卽吐之」であつたらう。世説のその記述は、かく明示的なのである。

○劉璵兄弟、少時爲主愷所憎。嘗召二人宿、欲默除之、令作坑。坑畢、垂加害矣。石崇素與璵・琨善。聞就愷宿、知當有變、便夜往詣愷、問劉所在。愷卒迫不得諱、答云、在後齋中眠。石便徑入、自牽出、同車而去。語曰、少年何以輕就人宿。（世説・仇隙第三十六・2）

○劉輿兄弟、少時爲主愷所嫉。愷召之宿、因欲坑之。崇素與輿等善。聞當有變、夜馳詣愷、問劉所在。愷迫卒不得隱。崇徑進於後齋索出、同車而去。語曰、年少何以輕就人宿。輿深德之。（晉書・列伝第三・石崇）

右は、劉璵・劉琨の兄弟が若いころ王愷に憎まれ、彼によつて危うく穴埋めにされかかり、すんでのところで石崇に助け出されたというのが大筋である。世説・晉書ともその大筋において一致するものの、かんじんの穴埋めに關して、「因欲坑之」というだけの晉書の記述では詳細は知り得ない。世説は、その逐一を「闇にほうむろうとして坑を作らせ、それができあがつて、いよいよ殺害しようとした。」というように、ここでも現実に事態が展開するその一つ一つにそくして記述している。この後の記述でも、

〔聞就愷宿、知當有變、便夜往詣愷。〕（世説）
〔聞當有變、夜馳詣愷。〕（晉書）

世説は、まず「愷のところて泊ったと聞き」それから「異変がきつとおこるであろうことを知り」と続けるというように、知覚から判断へという精神的な営為を順に表わす。さらには、

〔答曰、在_二後齋中_一眠。石便徑入、自牽出、（世説）

〔崇_二徑進_三於後齋_一、索出、（晋書）

晋書がただちに書齋に飛びこんで救出したとだけ記すその次の次第を、世説は、愷の苦しまぎれの言いのがれの言葉をまじえて、救出という事態の展開にそくして刻明に記述しているのである。

(三)

右に縷述した通り、世説の記述は、事態の展開を現実_ニにそくして逐一描き出すといった特徴をもつ。現実_ニにそくした記述とはいえ、それは、実際に起った歴史的事実の忠実な記録をめざしたものでは勿論ない。現実_ニに起った事実をそのまま記録すること、事態の展開を現実_ニにそくして記述することとは自ら別である。

世説を読む者は、恐らく誰しも所伝が、しかもその多くが歴史的事実から遠いといった印象を受けるのではない。所伝の信憑性は、世説の成立後間もない頃すでに疑われているのである。劉義慶（四〇三—四四四）が世説を編述して間もなく、南朝梁の劉孝標（四六二—五一二）が世説本文に関連する所伝を博くさまざまな書から抜粋し、注として本文に付記（そのなかには、たとえば排調第二十五の7に付記したような本文に数倍する長文のものもある）して、しかも相当数の本文について、それと関連所伝との事実関係にまで言及しているが、その言及は、世説の誤謬をあげつらうものが殆どを占める。

斯說謬矣（言語第二・1） 猶疑斯文爲謬也（文學第四・57） 世說虛也（雅量第六・40） 世說所_レ言謬矣（識鑒第七・1） 世說謬設_二斯語_一也（賞譽第八・143） 世說此言妄矣（品藻九・19） 世說此言迂謬已甚（規箴十・21）……

右に掲出した一部の例からも知られるであろうが、世説の所伝は事実とほとんど無縁であるかのである。たとえば「諸書無_レ聞、唯見_二世説_一、自未_レ可_レ信」（惑溺第三十五・5）に至っては、世説に独自というだけで信じられていないのであって、これが端的に示すように、世説の所伝は信憑性を欠く。とはいえ、それはむしろ当然でもあらう。世説は本来的に事実の記録をめざしたものではない。隋書の經籍志が世説を「小説」に分類し、その説明にあてた「街説巷語之説也」ということが世説の性格を端的に物語る。

もっとも、劉注の指摘や史書の扱いに徴するまでもなく、世説の内容自体が、その所伝が「街説巷語之説」であることを窺わせる。その徴証の一つに、たとえば、

郗公は、永嘉の喪乱にあい、郷里でひどく飢えに苦しんだ。郷人は、郗公が名声徳望のある人だったので、その苦しみを伝え、みなで養った。郗公は、ある時、兄の子の遇と甥の周翼との二人の子供を連れて食べに行った。郷人はいった、「私達もそれぞれに飢え苦しんでいます。あなたが賢者なので、みなであなたを救おうとしましたです。とても一緒に救う余裕はないでしょう」と。郗公はそこで独りで出かけて食べ、そうして飯を兩頬のあたりにほおばって帰り、それを吐き出して二人の子供に食べさせた。その後、みな生きながらえて江南に渡った。（世説・德行第一・24）

右は「郷人」の例であるが、これと同様に、世説の所伝がさまざまな階層のそれこそ雑多な人々の言動を積極的に

取りこんでいることを挙げることができる。あるいはまた、世人の評判に強い関心を寄せていることにもそれは知られるであろう。

世_レ以此定_二華王之優劣_一。(德行第一・13) 當時以爲_二美事_一。(同・22) 時論_レ此多_レ之。(同・41) 時人謂爲_二試守孝子_一。(同・42) 時人以爲_二純孝之報也_一。(同・45) 于_レ時以爲_二名言_一。(言語第二・41) 時賢以爲_二德音_一。(同・47) 時人以爲_二能_一。(同・60) 時人善_レ之。(同・106) 諸人以爲_二佳_一。(政事第三・18) 一時絶歎、以爲_二名通_一。(文学第四・46)……

こうした世評を所伝の末尾に付しているのは、言うまでもなくその所伝が世評をともなつて巷間に伝えられていたからに外ならない。世説は、そうした所伝を収載することにはなほだ意欲的であつた。恐らく世評をともなわない所伝も、その多くは、世人の興味を惹く話として、書伝あるいは口伝その他によつて広く巷間に伝えられていたものであつたろう。世説という書名は、その自らの性格を言い表わしたものであつたに違いない。

前述した世説の記述上の特徴、すなわち事態の展開を現実にくくして一つ一つ記述するということも、世人が関心を寄せる話を興味深く語ろうとするその意欲の自らに然らしむるところであつたろう。一例をあげれば、

阮步兵の嘯_{うそ}く声は数百歩の遠くまで聞こえた。蘇門山の中に忽然と仙人(真人)が現われ、きこりたちは皆そのことを言い伝えた。阮籍が行つてみると、その人が巖のそばに膝をかかえているのが見えた。籍は憤に登つて近づき、足をなげ出して対坐した。籍が太古からの事蹟を論じ、上は黄帝神農の玄妙虚静な道をのべ、下は夏殷周三代の盛徳の美を思ひはかつて訊ねたが、仙人はキツとして坐つたまま答えない。かさねて人為を超越した世界のことや精神をしずめ気を導く仙術についてのべて、相手の様子をうかがうと、やはりあいかわらずで、じつと

一点を凝視したままふり向かない。籍は、そこでかれに向ってひとしきり長嘯したところ、やっと笑って言った、「もう一度やるがよい」と。籍はまた長嘯し、思いのたけをつくして山の中腹あたりまで降りてくると、上の方でヒューという声が聞こえ、幾組かの打楽器や管楽器の演奏のように林や谷に響きわたった。ふりかえつてみると、さっきの人が嘯いているのであった。（世説・棲逸第十八・1）

右は、阮籍に関する事実の伝記的な記録では勿論ない。いわば阮籍にまつわる一篇の説話としての性格が色濃い。晋書の阮籍伝にもこの話は伝えられているが、そこでは、世説の「眞人」は「孫登」と実名が記され、全体の記述も半分以上に縮約されている。^⑨ 世説の説話風な所伝を容易にはうけいれ難い恐らくそうした事情から、その伝記的記録への変容を、晋書がはかったとみるべきもののように思われる。

(四)

世人が関心を寄せる話を興味深く語ろうとするいわば説話への意欲ともいうべき世説の志向は、その記述を根本的に規定していたはずである。事態を現実の展開にそくして記述するというのは、そのあらわれであろう。特徴的なそのあらわれに付随するより具体的なあらわれとしては、助辞や修飾語などが多用されている点が注目される。

助辞の多用については、すでに吉川幸次郎氏に御指摘があり、それが「清談の言語の無意識な浸潤の為のみならず、更に意識的に哲学を文章に象徴させようという動機」、さらには「一句の字数を四字もしくは六字に統一しようという文章の形式上の要求」（前掲書四六九頁）などから起ったと説かれるのであるが、たとえば、

〔有千里蕤、但未下鹽鼓耳。〕（世説・言語二・26）

〔千里蕤、末下鹽鼓。〕（晋書・王導伝）

〔袁宏始作東征賦、都不道陶公。〕（世説・文学四・97）

〔宏賦又不及陶侃。〕（晋書・文苑袁宏伝）

〔羅既至、初不問郡事、徑就謝、數日飲酒而還。〕（世説・規箴十・19）

〔含至、不問郡事、與尚累日酣飲而還。〕（晋書・羅含伝）

右に傍線を付した助辭などは、哲学とは無縁であるし、またそれらが三字句ないし五字句の中に使われているので、四・六字句への統一への要求とは無関係といわざるを得ない。もつとも、哲学を文章に象徴させるといふことは別に、一句を四字あるいは六字に整える傾向は確かに看取できる。けれども、それは、むしろ当時の中国古文一般の通性とみるべきではなからうか。四字句・六字句への志向は、世説以上に晋書の記述において著しい。

世説に独自の特徴という点では、助辭ばかりでなく飾修語を含めた多用をこそ、なによりもまず指摘しなければならぬ。それらは説話への意欲のあらわれ、なおいへば、世人が関心を寄せる所伝をそれこそ精彩あらしめるために世説が凝らした記述上の意匠に外ならない。今、任意に挙例すれば次の通りである。（右が世説で左が晋書の例）

〔故當小未精覈耳。〕（文学64）

〔但小未精耳。〕（王琰伝）

〔後爵之。〕（方正11）

〔帝大怒還内、作手詔滿一黃紙、遂付廷尉、令收、因欲殺之。〕（方正30）

〔帝大怒而起、手詔付廷尉、將加戮。〕（周顗伝）

〔術〕

〔潘云、可作耳。要當得君意。〕（文学70）

〔岳曰、當得君意。〕（葉広伝）

〔我欲先痛罵王武子、然我將罵濟而後官爵之。〕

大怒、便欲刃之。(方正38)

怒、欲刃之。(孔羣伝)

〔或謂王公可潛稍嚴以備不虞。(雅量13) 或勸導密爲之防。(王導伝)〕

得其任。以此推之、容必能立勳。

(識鑒22)

〔乃喟然歎曰、(賞譽17) 乃歎曰、(王湛伝)〕

得其任。所以知之。(謝玄伝)

〔見使才皆盡、雖履屐之間、見其使才、雖履屐間、亦平子諫之、並言不可。(規諫郭以爲不可。(王澄伝)〕

箴10)

〔伯仁等悉從命。(賢媛18) 顗等從命。(列女周顗母李氏伝)〕

〔便徑渡。(術解4) 便渡。(王濟伝)〕

〔以重喪、顯於公坐、飲酒食肉。(任以重喪、顯於公坐、飲酒食肉於公座。(何曾伝)〕

誕2)

〔數投馬絕叫、(任誕34) 投馬絕叫、(袁耽伝)〕

〔王嘯詠良久、直指竹曰、(任誕46) 徽之但嘯詠、指竹曰、(王徽之伝)〕

〔見王直言曰、(簡傲10) 謂述曰、(謝万伝)〕

〔袁虎率爾對曰、運自有廢興。豈必諸人之過。桓公懷然作色、顧謂四坐曰、(輕詆11) 袁宏曰、運有興廢、豈必諸人之過。溫作色、謂四座曰、(桓溫伝)〕

これら所伝を精彩あらしめるための意匠は、具体的には行為・状態それ自体に対する、あるいはそれらの時間的ないし空間的な限定・修飾に外ならないが、言うまでもなく、そうした限定・修飾は右の語的なものから、さらに句的なものへ、

〔武子前置數斛羊酪、指以示陸曰、(言語26) 濟指羊酪、謂機曰、(王導伝)〕

〔崇視訖以鐵如意擊之。(汰侈8) 崇便以鐵如意擊之。(石崇伝)〕

そしてそれらの総合としての文単位のもので連続的にさまざまな記述に及ぶ。

○庚太尉在武昌、秋夜氣佳景清。佐吏殷浩・王胡之之徒、登南樓理詠。音調始適、聞函道中有屢聲甚厲、定是庾公俄而率左右十許人步來。(容止24)

○亮在武昌、諸佐吏殷浩之徒、乘秋夜往共登南樓。俄而不覺亮至。(庾亮伝)

なお助辭に關して言へば、右の例のうち、世説の「定是」は晋書にはない。これを始めとして、吉川幸次郎氏が「大体當時の口語の語法が文章に採り入れられたものと考えられる」「前代には全くその淵源を求め難い新しい助字」(前掲書四六三頁・四六二頁)、ほかにたとえば「都不」「都無」なども、説話への意欲のあらわれとして捉えるべきではあるまいか。世説の所伝が「街説巷語之説」であつてみれば、巷間に語られる語法までも世説が援えて記述中に取りいれているのはいわば必然でもあろう。助辭ばかりでなく、語彙でも當時の口語と認められる例が、たとえば、

〔由此李氏在世得方幅齒遇。(賢媛十九・18)〕

〔由此李氏遂得爲方雅之族。(列女周顗母李氏伝)〕

右の「方幅」(新釈漢文大系『世説新語』下の当該語釈に、晋・宋ごろの方言という、とある)をはじめ少なからず散見するようであるが、これに關連して注目すべきは、所伝中に會話を積極的に組み入れていることであらう。

〔太傅時年七八歲。嘗青布袴在兄膝邊坐。諫曰「阿兄、老翁可念。何可作此。」突於是改容曰、「阿奴欲安時年七八歲。在奕膝邊、諫止之。突爲改容、遣之。」(列伝第四十九・謝奕)〕

〔放去邪。〕遂遣之。(德行第一・33)

〔王甚遽、問謝曰「當作何計。」謝神意不_レ變。〕（雅量第六・29）

〔坦之甚懼、問_三計於安。安神色不_レ變。〕（列伝第四十九・謝安）

〔謝公曰「小者最勝。」客曰「何以知_レ之。」謝公曰、（品藻第九・74）

安曰、「小者佳。」客問_三其故。安曰、（列伝第五十・王猷之）

〔徑就_レ謝、數日飲酒而還。桓公問「有_三何事。」君章云、（規箴第十・19）

與_レ尚累日酣飲而還。溫問_三所_レ刻事。含曰、（列伝第六十二・文苑・羅含）

〔便_{令_レ種_レ竹}。或問「暫住、何煩爾。」王嘯詠良久、（任誕第二十三・46）

〔便_{令_レ種_レ竹}。或問_三其故。徽之但嘯詠、（列伝第五十・王徽之）

右のように同じ内容を表わしても、晋書が地の文であるところで、世説は会話を使う。会話の利用は、当時の口語語彙や語法を取りこむのと同じく、説話への意欲が与つて大きな原動力となつていたに違いない。晋書は、この点でも事柄の説明的な文章としての性格が色濃い。対照的に、世説は、説明的であるよりは、むしろ現実の精彩ある再現をめざしている。それは、前節で、世説記述の特徴が事態を現実にくくして一つ一つ展開させている点に求められたそのことと軌を一にする、いわば世説の基調なのである。

（五）

ところで、世説の記述と関連が認められる文献類は、晋書以外にそうとうな数にのぼる。^⑩始めに前置きした通り、世説の記述上の特徴を主に史書との比較において捉えるといった方法を小稿が採る関係上、多くの関連文献の

うち、ここでは史書ないしそれ相当の書しか取りあげないが、それが史書の性格をもつ限り、比較の対象を拡げて、晋書の場合とほぼ同様の指摘が可能である。

まず三国志についてみる。左の例は、龐士元（龐統）が司馬德操（司馬徽）を訪ね彼と話を交すという、世説・蜀書共通の所伝である。

○南郡龐士元、聞_三司馬德操在_三潁川_一、故_二二千里候_レ之。至、遇_二德操采_二桑_一。士元從_二車中_一謂曰「吾聞、大夫處世、當_二帶_二金佩_二紫_一。焉有_二屈_二洪流_二之量_一、而執_二絲婦之事_一。」德操曰「子且_二下_二車_一。子適知_二邪徑之速_一、不_レ慮_二失道之迷_一。昔伯成耦耕、不_レ慕_二諸侯之榮_一。原憲桑樞、不_レ易_二有_二官之宅_一。何有_二坐則華屋、行則肥馬、侍女數十、然後爲_レ奇。此乃許父所_二以慷慨_一、夷齊所_二以長歎_一。雖_レ有_二竊秦之爵、千駟之富、不_レ足_レ貴也。」士元曰「僕生出_二邊垂_一、寡_レ見_二大義_一。若不_二一叩_二洪鍾_一伐_二雷鼓_一、則不_レ識_二其音響_一也。」（世説・言語第二・9）

○潁川司馬徽、清雅有_二知人鑒_一、統弱冠往見_二徽_一。徽採_二桑於_二樹上_一坐、統在_二樹下_一。共語自_レ晝至_レ夜。徽甚異_レ之、稱_二統當_二爲_二南州士之冠冕_一、由_レ是漸顯。（三国志・蜀書七・龐統）

共通するとはいっても、右の通り、龐士元（統）が司馬德操（徽）の語る話に敬服するという世説と、逆に、司馬が龐をすぐれた者と認めるという蜀書と、登場する人物のシテ・ワキの関係が二つの所伝で逆転している。誰を主に物語るかによって所伝に異なりが生じているのであるが、両所伝に物語られる状況や場面、さらにはそこで話した事によって相手を評価するという基本的な筋立てなどが一致することからも、この例をもって両者を比較することにさして難はなからうかと思われる。

世説の記述上の特徴はこの例においても著しい。まず龐が司馬を訪ねるくだりをみるに、蜀書のその記述は「往

見_レ微」とはなはだそつけない。世説では、それを「聞_三司馬德操在_三潁川_一、故_二一千里候_レ之。至_、遇_三德操采_二桑_一。」と現実_二に事態が展開するその流れにそくして逐一記述している。またそれぞれ評価する相手を異にする、とはいえそうであることによって互いに独自性がむしろあらわとなっているこの所伝の核心部分の記述でも、蜀書は、概略を「共語自_二晝至_一夜。微甚異_レ之。」と外面的に描くに過ぎない。世説は、晋書との比較で特徴的であつたように、会話を使い、それを具体的に伝える。ことに司馬の「子且下_レ車」などは、無礼にも車に乗つたまま話しかける魔_二にいかに対応したかその場面を彷彿とさせる、そうした現実の事態の再現をめざした記述とみることができる。

○魏明帝爲_三外祖母_二築_三館_一於甄氏。既成、自行視、謂_二左右_一曰「館當_二以_レ何爲_レ名_一。」侍中繆襲曰「陛下聖思齊_二於哲王_一、罔極過_三於會閔_一。此館之興、情鍾_三舅氏_一。宜_下以_三渭陽_一爲_レ名。」（世説・言語第二・13）

○帝思_二念舅氏_一不已。暢尙幼、景初末、以_レ暢爲_三射聲校尉_一、加_三散騎常侍_一。又特爲起_三大第_一、車駕親自臨_レ之。又於_三其後園_一爲_三像_一（暢の父）母起_三觀廟_一、名_三其里_一曰_三渭陽里_一、以追_三思母氏_一也。（三國志・魏書五・文昭甄皇后）

右は魏書との比較例である。世説と魏書とで、渭陽と名付けられる対象が館と里というように相異なるけれども、同じく舅氏に因んでその名付けが行なわれるという一致した内容である。この例においても、会話を取りこんでいるのはやはり世説の所伝である。魏書の所伝には会話がなく、恐らくそのことと無縁ではなからうが、事柄の結果を伝えるだけの外面的な記述に終始している。いわば、事態が現実_二に展開してゆくその流れの中で会話が交されるといった記述をし、それによって現実の精彩ある再現がなされている世説とは際立つた違いが認められるであろう。

次には後漢書の一節を掲げるが、孔融がとらえられた後、彼の二子が少しも動揺の色を表わさなかつたという世

説と共通する所伝である。

○孔融被_レ收、中外惶怖。時融兒大者九歲、小者八歲。二兒故琢釘戲、了無_ニ遽容_一。融謂_ニ使者_一曰「冀罪止_ニ於身_一。二兒可_レ得_ニ全不_一。」兒徐進曰「大人豈見_ニ覆巢之下_一、復有_ニ完卵_一乎。」尋亦收至。（世説・言語第二・5）

○初、女年七歲、男年九歲、以其幼弱得_ニ全_一、寄_ニ它舍_一。二子方弈棊、融被_レ收而不_レ動。左右曰「父執而不_レ起、何也。」荅曰「安有_ニ巢毀而卵不_レ破乎。」（後漢書・列伝第六十・孔融）

右の世説・後漢書の同じ内容でも、孔融伝の記述は「二子方弈棊、融被_レ收而不_レ動」とあつて、事柄の概略を描くに留まる。また会話を使うとはいへ、「左右曰」「荅曰」とある限りで、子供の返答の中身に専ら関心を寄せているに過ぎない。事態を現実にくくして記述するのはここでも世説である。孔融がとらえられるや「中外惶怖」となつたという、丁度その捕縛に際して、釘刺しあそびに無心に興じる二子を前に、孔融は彼らの安否を使者に訊ねる。使者とは、捕縛に遣わされた者であらう。使者がそれに答えるよりさきに、子は自らの運命を覚つた言葉を返す。その「徐進曰」は、まさに緊迫した現実の事態がまのあたりに展開しているといった、読む者に臨場感を抱かせる。と同時に、その記述は、絶望的な状況にもかかわらず落ち着きはらつた子の態度まで彷彿とさせる。そうした事態を現実の展開にそくして記述するといった特徴はもとより、助辞の使用でも、「故琢釘戲、了無_ニ遽容_一」などに上述してきた世説の特徴は著しい。

ところでこの世説の所伝に対して、劉孝標が注として付した異聞がある。後漢書の右に比較の対象とした孔融伝の記述にほぼ重なるそれは、

○魏氏春秋曰、融對_ニ孫權使_一有_ニ訕謗之言_一、坐_ニ棄市_一。二子方八歲九歲。融見_レ收、弈棋端坐不起。左右曰「而父

見_レ執。」二兒曰「安有_二巢毀而卵不_レ破者_一哉。」遂俱見_レ殺。

右のように世説の所伝とはかなりの違いをみせる。所伝の内容や記述の類似という点で後漢書と魏氏春秋との関連が推測されるが、ここでは、むしろその両書の相似た性格に注目したい。

范曄はかかる編纂物（范曄以前に存在した七八種の後漢書を指す——榎本注）を材料として（後漢書を——同前）書いたので、文章を改める必要を生じた點もあり、又范曄が餘程の名文家で、やはり歴史を自分の頭で書くといふ抱負があつた爲め、前人の書に満足せずして書き改めた點もあるであらう。（内藤湖南『支那史學史』内藤湖南全集第十一卷・一五二頁）

臣松之案——中略——孫盛改_二易泰言_一。雖_レ爲_二小勝_一、然檢_二盛言諸所_三改易_一、皆非_二別有_二異聞_一。率更自_レ意制、多不_レ如_レ舊。（三國志・魏書二十二・陳泰伝の裴松之注）

後漢書についての内藤湖南の指摘、また魏氏春秋についての裴松之の批判にそれぞれ知られる通り、両書ともにそのもとづくものと資料を書き改めている。それが具体的にどの程度まで及んでいたのかは個々の例において区別であつたろうが、本来、史書編述上の「述而不_レ作」という準則に照してあるまじき書き改めが行なわれていたということは、この際看過し得ない。

というのも、くだんの裴松之の批判は、魏氏春秋に記述されている言葉を取りあげ、その言葉は魏氏春秋の編述者である孫盛が「改易」したものであるという、外ならぬ言葉をめぐつてなされたものだからである。過去の人が口にした言葉を忠実に再現することは殆ど不可能に近い。そうであるからこそ、孫盛を批判した裴松之も、その批判に続けて「凡_レ記言之體、當_レ使_レ若_二出其口_一。」と可能な限りその人の口から出たように、記述すべきであるとの、

いわば指針を示すに留まらなければならなかった。世説は、その再現することが不可能に近い言葉、つまりは会話を、書き改めが行なわれている後漢書や魏氏春秋、ひいては「一層それ（書き改め——榎本注）が甚だしく」（内藤湖南・前掲書一五二頁）なった晋書などと較べても遙かに積極的に活用していたのである。

もっとも、会話の使用は世説記述の特徴の一つに過ぎない。現実の精彩ある再現をめざしたさまざまな工夫が凝らされている、会話の作爲的な利用を含むその記述上の特徴は、おおむね勝手にこしらえ上げたもの（率自以意制、多不_レ如舊）と前述のように裴松之によって批判されている魏氏春秋の次に掲げる所伝と対比しても、対応する世説の所伝中に明らかに指摘することができる。

○許允婦、是阮衛尉女、德如妹。奇醜。交禮竟、允無復入理、家人深以爲憂。會允有客至。婦令婢視之。還答曰「是桓郎」。桓郎者、桓範也。婦云「無憂、桓必勸_レ入」。桓果語許云「阮家既嫁醜女_二與卿_一、故當有_レ意。卿宜察_レ之。」許便回_レ入_レ內、既見婦、即欲_レ出。婦料其此出無復入理、便捉裾_レ停_レ之。許因謂曰「婦有_二四德_一、卿有_二其幾_一。」婦曰「新婦所乏唯容爾。然士有_二百行_一、君有_レ幾。」許云「皆備。」婦曰「夫百行以_レ德爲_レ首。君好_レ色不_レ好_レ德。何謂_二皆備_一。」允有_二慚色_一、遂相敬重。（世説・賢媛第十九・6）

○魏氏春秋曰——中略——允妻阮氏、賢明而醜。允始見愕然。交禮畢、無復入意。妻遣婢視之。云、「有_二客姓桓_一。」妻曰「是必桓範、將_レ勸使_レ入也。」既而範果勸_レ之。允入、須臾便起。妻捉裾_レ留_レ之。允顧謂婦曰「婦有_二四德_一、卿有_二其幾_一。」婦曰「新婦所乏唯容。士有_二百行_一、君有_二其幾_一。」許曰「皆備。」婦曰「士有_二百行_一、以_レ德爲_レ首。君好_レ色不_レ好_レ德、何謂_二皆備_一。」允有_二慚色_一、知_二其非凡_一、遂雅相親重。（三国志・魏書九・夏侯玄伝の裴松之注）

右に掲出した二つの所伝中、傍線を付したのは対応記述のないそれぞれに独自の部分、波線を付したのは対応記述があるものの少しく表現の異なる部分、そしてそれらの付していないのは双方で記述が一致する部分である。世説所伝中の付線の多さ、またその部分に限った記述からも、世説がいかに現実の事態の展開にそくした記述をめざしていたか、一見してそれと知られるであろう。この外、魏氏春秋と同じように今は佚書となっていてその全貌は知り得ないものの、世説の所伝と一致ないし類似する所伝をもつ書が世説の劉孝標注や三国志の裴松之注その他に比べてだしく拾いあげられている。それらのうち、比較の対象をこと史書に限れば、おおむね魏氏春秋の場合と相似た世説の特徴が認められることは、もはや言を俟たない。

最後に高僧伝の記述を取りあげるが、同じ特徴は所伝の随所に指摘することが可能である。挙例自体すでに確認の意味しかもたないので、典型例を一つ挙げるに留め、他はそれからの類推にゆだねたい。

○支道林還_レ東、時賢並送_ニ於征虜亭_一。蔡子叔前至、坐近_ニ林公_一。謝萬石後來、坐小遠。蔡暫起、謝移就_ニ其處_一。蔡還、見_ニ謝在_レ焉_一、因合_レ褥舉_レ謝擲_レ地、自復坐。謝冠幘傾脫、乃徐起振_レ衣就_レ席。神意甚平、不_レ覺_ニ臆沮_一。坐定、謂_レ蔡曰「卿奇人、殆壞_ニ我面_一。」蔡答曰「我本不_レ爲_ニ卿面作_レ計_一。」其後二人俱不_レ介意。（世説・雅量第六・31）

○一時名流、並錢_ニ離於征虜_一。蔡子叔前至、近_レ遁而坐。謝萬石後至、值_ニ蔡暫起_一。謝便移就_ニ其處_一。蔡還、合_レ褥舉_レ謝擲_レ地。謝不_ニ以介意_一。（高僧伝・卷第四・支遁）

右は高僧伝のうち支遁伝の一節である。記述の繁簡によっても明らかな通り、支遁伝は、席の奪いあいの次第を概略だけ表わしているに過ぎない。引用部分の前半はほぼ相似た記述であるが、それでも世説は、後れてやって来た

謝万石の座が林公（支道林・支遁）のそれに「坐小遠」というようにやや遠く離れていることを示す。前に来て林公の近くに座を占めていた蔡子叔がしばらく席を立つや謝が蔡の座に移ったのはそのためであつて、その記述によつて、如実に宴席にある人々の位置関係が明らかとなる。中程の記述は、両書でかなりの違いをみせる。席を立つた蔡が戻るとあつて、支遁伝では、これにいきなり「合_レ擗_レ擧_レ謝擲_レ地。」と続けているが、世説は、まず「見_三謝在_二焉_一」、それによつて（「因_レ」）、その乱暴な挙にでるといふようにどこまでも現実の事態の展開にそくした記述がなされている。これ以下の支遁伝に無い記述、すなわち「（蔡）自復坐。謝冠幘傾脫、乃徐起振_レ衣就_レ席。」やさらには「坐定」に続く会話を織りまぜた記述なども、現実の精彩ある再現をめざすといった、上述のいわゆる説話への意欲の顕著なあらわれに外ならない。

ところで右の謝・蔡の席の奪いあいをめぐる所伝は、晋書にも、世説に近い記述で伝えられている。世説にもとづくとと思われるそれは、

○嘗與蔡系_二送_三於征虜亭_一、與_レ系爭言。系推_レ萬落_レ牀、冠帽傾脫。萬徐拂_レ衣就_レ席、神意自若。坐定、謂_レ系曰「卿幾壞_三我面_一。」系曰「本不_レ爲_二卿面_一計。」然俱不_レ以_レ介意。（晋書・列伝第四十九・謝万）

右のように、席の奪いあいに関する部分を大幅に縮約して、「與_レ系爭言」と表わすに過ぎない。晋書では、かくて世説に特徴的な記述のその大くは省かれてしまふのである。

(六)

さて最後に世説の性格について考えてみるに、もとより世説は個人の伝記を伝えたものではない。「德行」以下

「仇隙」に至る三十六の標題を立て、そのおのおのにふさわしい所伝を各標題ごとに編述したいわば類話集である。類話を編述したというその性格に明らかであろうが、世説は、本来的に史実あるいは個人の伝記などとは殆ど無縁なのである。こうしたそもそもの成り立ちからして、世説が「述而不作」という史書の原則やそれを具体的に祖述した「辭勝而達實、固君子所不取。況復不勝而徒長虛妄哉」（前掲の三国志・魏書二十二・陳泰伝に付した裴松之注の文）という考えにとらわれていたとは到底考え難い。前掲の通り、劉孝標が世説に付した注の中で世説の所伝をしばしば誤謬・虚妄と批判しているが、そうした批判を浴びせかけること自体、世説の性格をわきまえない、いつてみれば見当違いではない。所伝の真偽の問題は、世説の編述者劉義慶の念頭にさしたる比重を占めていなかったであろう。個人の伝記をめざしたものでない以上、その伝記的な事実などむしろ些末な、それこそ取るに足らぬことであつたに違いない。

いわば類話集という世説の性格は、世説の関心がもつばら標題に表わされているような事柄それ自体にあつたことを思わせる。「德行」から「仇隙」に至る三十六の標題の下に編述されたその事柄は、まさに人事の万般に及ぶ。それこそ、人間に対する興味の広く、そして限りない深さを物語つて余すところない。換言すれば、そうした興味を抱いていたことが事柄それ自体の編述に赴かせたということでもある。伝記的事実に拘泥するはずはもとよい。かくて世説が説話というかたちを取るのには必然でもあつたらう。

総じて、「賢媛」篇は、解放的で自由な、時には奔放な女性の話を中心に集めており、「列女伝」は、きまじめで、つましく、やや狭小な、比較的融通のきかない女性の伝を主要な要素としていることがわかる。（豊福健

二「世説『賢媛』篇と晋書『列女伝』」「小尾博士退休記念『中国文學論集』二八九頁）

右のようにまとめられる特色も、世説の説話としての、晋書の史伝としてのそれぞれの性格の自らなるあらわれに外ならない。世説は、隋書の経籍志が規定した通りの、果して「街説巷語之説」であつたのである。

世説が説話としてのかたちを取り、それが人事万般に及ぶ事柄への興味に導かれての必然的なあらわれであるといふことから、その説話としての性格が、具体的に、現実の精彩ある再現をめざした記述としてあらわれるのも、これまた必然であつたろう。小稿は、その記述上の特徴として現実の事態の展開にそくしているという点を主に指摘したのである。ごく少数の例からのそうした指摘に、もとより例外は少なくない。けれども挙例の限り、そして一般的な傾向としてはその指摘に大過ないはずである。もつとも、それは、言つてみれば世説という書名にすでに予測されてしかるべきことの検証に過ぎないかも知れない。

註

- ① 房玄齡ら二十一人が編述した帝紀十卷・志二十卷・列伝七十卷・載記三十卷の都合百三十卷から成る晋書を指す。この晋書の「修晋書詔」には、当時「十有八家」の晋の歴史書があつたと伝える。その殆どが隋書の経籍志に見える。
- ② 内藤湖南著『支那史學史』（内藤湖南全集第十一卷・一五二頁）
- ③ 前稿「晋書編述の一面」『均社論叢 10』（小川環樹先生古稀記念号）
- ④ 今日、通常は「世説新語」と呼称されるが、「世説八卷 宋臨川王劉義慶撰」「世説十卷 劉孝標注」（以上隋書経籍志）、また「世説八卷 劉義慶撰」（旧唐書経籍志）、あるいは「劉義慶世説八卷」（新唐書藝文志）などに見るように、そのものと書名は「世説」である。「世説新語」の呼称が用いられるのは、『中國古小説集』（世界文學大系71 筑摩書房）の世説の解説によれば、五代末宋初とされる。
- ⑤ 世説と晋書との関係は、晋書が世説を利用するという一方的なものである。しかし晋書の利用は、世説の所伝を全面的に採るものから、極く一部を用いて他書の所伝をそこに交えるものまでまことに区別である。しかも辞句その他においても、

必ずしも忠実に引き写してはいない（以上、前稿で既述）。かかる晋書の所伝は、それが世説を利用したものではあっても、晋書に独自の性格を十分窺わせる。従って、小稿では両書の関係を一度外視して比較を行なう。後漢書・三国志・高僧伝などについても同様の扱いをする。

なお、大矢根文次郎氏には「世説の原據とその截取改修について」（『東洋文学研究』第九号）と題する論考があり、世説が既存資料をいかに利用していたかについて「義慶は己が意にかなう文章を資料たる史文中に見出し出したときは、あるいは、無修正で取り入れ、あるいは、若干の改修を試みても史実をゆがめない範囲内でなされたにちがいない。」と説く。けれども前稿で批判した通り、劉孝標注が伝える異聞だけを用いて比較するというその方法に問題があり、しかもその作業は単なる類同辞句の摘出が主になされているに過ぎず、世説の個性を、ことには記述上のそれを的確につかみ得ているとはみなし難い。同じ所伝をいくつかの書がそれぞれに伝えていることは劉孝標注のみならず三国志の裴松之注・晋書裴注などでもその例があり、後にそれら注として拾いあげられる既存資料のどれを世説が利用したかの確認には慎重でなければならぬ。

一例をあげてみるに、(一)節の始めに掲げた張憑の所伝については、それに関する異聞として劉孝標注が取りあげているのは「宋明帝文章志」の一節だけであるが、この世説の所伝は、太平御覽卷六一七「談論」所収の郭子の所伝と重なる、というより、むしろ郭子を多少簡略化したものに外ならない。ところが同じ太平御覽には、卷二九「太常博士」に郭子の一部が収載されていて、これは、「談論」所収の郭子所伝と同一箇所の記述でありながら、恐らく縮約されているのであろうが、遙かに短い。そうした違いとはまた別に、やっかいなことに、たとえば世説所伝中の「理窟」「勁粹」「勁率」などは、その縮約されたと思われる郭子に類同し（「理窟」「勁粹」）、「談論」所収のそれとは違う（「理窟」「勁粹」）といった点も認められる。この二つの郭子所伝のいずれを比較の対象とするかで世説の把握に大きな違いが生じてくるのもとより、後者の「談論」所収の郭子所伝が原文を伝えたものであるという保証は容易に求め難い。隋書經籍志には「郭子三卷 東晉中郎郭澄之撰」と記載があるのだから、同じ子部「小説」に分類される郭子を世説が利用した蓋然性は高い——高いだけで、一例だけでは確定できない——とはいえ、そうしてこの郭子を始めとする先行資料の利用状況を見極める必要を痛感してはいるものの、それら資料の精査がまず前提とならなければならぬのであって、その準備はまだ整わない。

⑥ 小稿が依拠したテキストは、四部叢刊本と尊経閣本（金沢文庫本）の二本である。この「劉」が尊経閣本に無いという以外に、断片的な引用例を含め挙例した全てにわたって、二本間で目立った異同は認められない。さらに晋書以下の諸書について

も、挙例の限り、諸本間で問題となる異同は、これまた認められない。従って以下には校異を示していない。なお、字体は通行のものを用いる。

- ⑦ このような言い方は、所伝が世説において始めて書き下されたいわば創作のものに最もふさわしい。この張憑の所伝は、註⑤に指摘した通り、郭氏に依拠したものの如くである。しかし遺憾ながら、これまたそこに指摘した通り、郭氏の原文を確実には復元しかねるのが実情である。この郭氏の所伝もその例なのであるが、世説が依拠した所伝を原文そのままに復元し、それをもとに比較することは、少なくとも現在の筆者の能力ではよくなし得ない。これが世説の所伝をそのあるがままで捉えようとする消極的な理由である。積極的なその理由としては、多くの所伝において先行資料類を加筆・削除等の手を加えることにより世説が独自の表現に改めている事実があり、先行資料そのままの利用であつても単なる転写の域に留らぬ自覚的な判断・選択を経たその結果であることを思わせ、従つてそれらの例でさえもゆうに世説の個性を窺わせるに足るものと認められることがあげられる。この二つの理由の、とりわけ後者の積極的な理由から、以下にも、世説の記述はその独自の性格によつて成り立つものとして扱い、その前提の上で論述を進める。

- ⑧ この省略部分は、劉孝標注所収の「南徐州記曰、徐州民多勁悍、號精兵。故桓溫常曰、京口酒可飲、箕可用、兵可使。」という南徐州記の傍線を付した記述をそのまま利用したものである。

- ⑨ 縮約は、ことに真人との出会いや応対のあり様を記述したいわば説話的な性格が強い部分において著しい。

- ⑩ 晋書ではこの引用部分に続いて「時人稱爲『名對。』」とあり、それが「千里」「末下」を対とみなしたものとすれば、「末下」は、「千里」が地名であることと同じく地名となる。斟注には、「末下」の地名とみるべき例をいくつか挙げてゐる。いずれにせよ、小稿は、世説にある「但」「耳」を晋書が欠いている事実を取りあげてゐるのであつて、その限り問題はない。

- ⑪ 世説所伝の関連記述ないし所伝を轉授した劉孝標注に取りあげられた書名を、葉德輝が「世説新語注引用書目」に拾ひ出している（新釈漢文大系・世説新語・下巻末に付載）。